

被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!

幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!

被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット News Letter

第35号 2003年11月26日(水) 発行：歴史資料ネットワーク(神戸大学文学部内)



講演後、質疑応答風景(2003年9月27日撮影、福厳寺講堂にて)

目次

巻頭言

文化施設をめぐる昨今の情勢をかえりみて	辻川 敦	・・・ 2
シリーズ歴史遺産を考える 第1回		
中世の国際交流と兵庫津		
～～福厳寺講堂にて、史料ネット講座を開催～～		
	市澤 哲	・・・ 3
「中世の国際交流と兵庫津」参加記		
	倉恒 康一	・・・ 4
	楊枝 智恵子	・・・ 4
宮城県北部地震での被災史料の調査救出活動		
～～引き続きカンパのお願い(2)～～		
	大国 正美	・・・ 5

まちづくりシンポジウム		
『バーチャル富松城歴史博物館から見えてきたもの』		
	後藤 真	・・・ 8
内閣府設置「歴史資料として重要な公文書等の適切な保存・利用等のための研究会」の中間取りまとめについて		
	(1)	
	辻川 敦	・・・ 9
震災史料整理		
プロローグ・山本家(中田樽丸関係)文書		・・・ 10
受贈図書・文献情報		・・・ 11
各研究会情報		
神戸都市史研究会	三村 昌司	・・・ 12
新刊紹介		
震災資料のゆくたて	菅 祥明	・・・ 13

文化施設をめぐる昨今の情勢をかえりみて

最近発行された、興味深い一冊の本を手に入りました。『未来をつくる図書館』（菅谷明子氏著、岩波新書、2003年9月）。ニューヨークの図書館事情を紹介するレポートです。本館の人文社会科学図書館に加えて、黒人文化・舞台芸術・ビジネスの3分野の研究図書館と、計85の地域分館からなるニューヨーク公共図書館。そこでは利用者に対して図書はもとより、さまざまなリサーチに有用な有料データベースやデジタル情報の提供、高い専門性を有する多くの司書の配置による行き届いた収書とレファレンス態勢、利用者に無料で開放される多くのPC端末や持ち込みノートPC接続用端末を備えた閲覧室、各種テーマで催される利用者向け講座が提供されています。これらをまるでマイ・オフィスや書斎のように利用して、各種リサーチに、ビジネスに、創作活動に旺盛に取り組むニューヨーカーたち。そう、そこに描かれているのは、図書館サービスとユーザーの、めまいがするほどの理想的な関係です。

驚くのは、このニューヨーク公共図書館が、公立ではなくNPO運営であることです。行政の補助も受けていますが、さまざまな営業努力をして、企業や団体、個人からの寄付や助成を募り、また市民ボランティアに支えられているのです。その寄せられる善意に相応なサービスが厳しく問われた結果、前記のような従来の図書館の殻を大きくうち破った事業が実現してきたのでしょう。

こういった、図書館をはじめとする文化施設のNPO化や民間委託の流れは、日本においても急速に実現しつつあります。ただし、アメリカとはかなり異なる様相で……。

阪神・淡路大震災以来、財政悪化が伝えられる阪神間の自治体は、長期不況のなか軒並み深刻な財政危機に陥り、相次いで財政再建計画を公表しています。そして、そのなかでほぼ例外なく、図書館・博物館・美術館といった文化施設のNPO化や民間委託が日程にのぼっています。なかには、受け皿がない場合の施設廃止をうたう自治体さえあります。

思えば、硬直した官僚主義社会の構造改革が真剣に議論された1990年代、その改革実現に向けた具体的な端緒とも言えるボランティアやNPOが大きくクローズアップされたきっかけが、震災でした。その流れのなかで、NPOが公共サービスの大きな部分を担う欧米のスタイルを知り、日本においてもこういった社会がこれから実現していくのかと、期待をこめて議論を見守ったことを覚えています。

いま、それが急速に実現しつつあるのだと言えるでしょう。しかしながら、図書館などの文化施設運営の分野で、市民の立場に立って公共サービスを担うボランティアやNPO、民間事業者が時間をかけて育ち、十分な検証と合意のもと事業を担うという過程を経ることなく、財政面で極端に追いつめられたなか否応なく進められるNPO化や民間委託が、果たして『未来をつくる図書館』のように実りある結果をもたらすのかと考えると、かつての期待感が急激にしぼんでいくのは否めません。

思えば、史料ネットもまた、震災を機に誕生した、歴史文化の分野におけるボランティア団体であり、広い意味でのNPO団体です。そして、阪神以来、この間の宮城資料ネットの活動に至るまで、災害時においては行政依存ではなくむしろボランティア・NPOが主体となって、公的セクターとともに被災史料・文化財保全にあたるというスタイルがほぼ完全に定着してきました。やはりこの分野においても、脱行政依存、市民・ボランティア・NPO主体は確実に進んできていると言えます。であればこそ、史料ネットもまた公的セクターと同様に、厳しい社会・経済状況のもとでその活動の社会的意義を従来以上に問われていくことになるでしょう。

そういった自覚が、われわれに求められているのだと思います。

辻川敦（つじかわ あつし / 史料ネット運営委員）

中世の国際交流と兵庫津

～ 福嚴寺講堂にて、史料ネット講座を開催 ～

市澤 哲



去る9月27日土曜日、兵庫の福嚴寺講堂において、史料ネット講座 - シリーズ歴史遺産を考える 第1回 - が開かれました。今回は「中世の国際交流と兵庫津」をテーマに掲げ、天理大学助教授の藤田明良氏（「アジアのなかの中世兵庫津」）、山口県立大学助教授の伊藤幸司氏（「国際交流と禅宗寺院」）のお二人に講演をお願いしました。

藤田氏の講演は、日本を含む東アジア地域全体の歴史的な変動と関連づけながら、中世の兵庫津が占めた位置を通観したものでした。様々な具体的な事例が紹介され、中世の兵庫津について考えるとき、どのような地域的、時間的広がりの中で問題をとらえたらよいのかが、よくわかりました。また、平清盛、遣明船など一般的にはよく知られている断片的な知識が、時代の流れに沿って要領よく整理され、中世兵庫津の概説としても聞き応えがありました。

伊藤氏の講演は、藤田氏が中世兵庫津における交流の担い手として注目した禅僧と禅宗寺院の実態を解きほぐした内容でした。とくに会場となった福嚴寺が、鎌倉の大覚寺、京都の建仁寺、長門の東隆寺、博多の聖福寺をつなぐ大覚派のネットワークの一翼を担っていたこと、中世には「世に唐人の館駅となす」といわれたこと、福嚴寺版

と呼ばれる印刷物を発刊する出版事業の拠点でもあったこと等の指摘は、参加者の兵庫津に対する関心を一層高めたことと思います。

講演の後、参加者を交えて1時間程度のディスカッションがもたれました。冒頭、神戸大学助手の森田竜雄氏から、禅宗以外の仏教諸派を含めて、中世兵庫津の宗教的変遷の説明がありました。それに続いて、会場からの質問に講演者が答えるかたちで、ディスカッションが進められました。質問は、福嚴寺に残る石造遺物の確認といった具体的なものから、日本中世における仏教が持った意味を問う「大きな」ものまで多岐にわたり、主催者側にとっては、今後の講座の企画を考える上で、大いに参考になったと思います。

講座の終了後研究者、マスコミ関係者、市民を交えての茶話会がもたれました。参加者の間で情報の交換、今後の企画についての懇談のほか、神戸、兵庫の歴史についての「雑談」に花が咲きました。私個人は、ある男性から終戦直後の兵庫の状況 - 学童疎開先から兵庫に帰って、目の当たりにした空襲後の兵庫の光景 - について、興味深いお話を聞くことができました。

（いちざわ てつ / 神戸大学文学部助教授）



「中世の国際交流と兵庫津」参加記

倉 恒 康 一

去る9月27日、神戸市兵庫区福厳寺で開かれた「史料ネット講座 歴史遺産を考える 中世の国際交流と兵庫津」に参加した。講師の藤田氏、伊藤氏ともに、導入部で室町時代の対外交流の中でもたらされ、現在でも身近な存在である文物（餛飩、外郎などなど）について触れるなど、丁寧でわかりやすい報告だった。



そのせいか聴衆の反応もよく、講演後には大変活発に質疑応答が交わされた。

一方で、参加者が歴史に興味のある層に偏ってしまっているという指摘がなされ、歴史学と市民との連携のあり方を考えさせられた。

講演内容だが、兵庫と博多という中世の日本列島における二大国際港湾都市を、藤田氏が主に兵庫について、伊藤氏が博多について、それぞれ報告した。藤田氏は兵庫が室町時代に国際貿易都市として浮上するに当たっての政治的・国際的背景として、日本が明を中心とする冊封体制に組み込まれたことを挙げ、将軍が明使を送迎するのに最も都合がよかったのが兵庫津であったためとした。更に兵庫津が備えていた「国王の港」としての機能を説明し、その中でも福厳寺などの禅宗寺院が将軍の宿所としての役割を果たしていたことを述べた。伊藤氏は、鎌倉時代の博多に大陸から伝播した禅宗が、大陸との交渉を維持する中で対外知識を集積した結果、将軍や諸大名に外交文

書の起草能力を買われて彼らの外交を担ったことを説明した。そして禅宗が海上流通を通じて兵庫をはじめとする列島各地の港湾都市へ広がって寺院間のネットワークを形成するとともに、禅宗寺院が中世社会において対外知識が蓄積・交換される、いわば国際交流センター的性格を有していたことを指摘した。両講師の報告から、当時の兵庫が東アジアの国際的ネットワークを構成する諸都市の一つであったことが明確に示されたと言える。

では、いくつか感想を記そうと思う。藤田氏報告からは、中世の物流の大動脈瀬戸内海の地域史を研究するには、東アジアの国際環境を踏まえるという広い視野が必要なことを痛感した。或いは、瀬戸内海沿岸地域と言わず、貿易陶磁の全国的な分布を考えれば、中世の各地域史を考える上で、東アジア情勢は常に念頭におかねばならないのかもしれない。一方、伊藤氏報告からは、地域における国際交流センターであった禅宗寺院から大陸の文物・知識が民衆生活にまで浸透するには、どのような経路があったのかと素朴な疑問を抱いた。年中行事の場での僧侶と地域住民との会食や贈答が一つの解答になるかもしれないが、地域社会において禅宗寺院が果たした役割を考える必要がある。

最後になったが、このような勉強の機会を与えてくださった史料ネットと、当日の報告者藤田・伊藤両氏、そしてその準備をくださった事務局の方々には厚く御礼申上げる。

(くらつね こういち

/ 広島大学大学院文学研究科)

「中世の国際交流と兵庫津」参加記

楊 枝 智 恵 子

講座への参加が3度目の私に、「参加した感想を」とのことですので、当日の様子を印象記風に記すことにします。まず、会場がお寺とあったので、もしや正座では・・・と一抹の危惧を感じながらも、期待を胸にJR兵庫駅で下車し、少し早めに福厳寺に着きました。玄関の間で受付の方々の丁寧な出迎えをうけた後、無駄のない禅寺特有

の張りつめた静寂に心地よい緊張を感じながら、右手の講堂に入りますと、そこは意外にも、和と洋が見事に調和した品格のある建物で、スクリーンを中心にすでに多くの椅子が用意されていました。そこにおられたご住職に伺いますと、震災で建て直されたとのこと、そのうちおよそ50人ほどの参加者が集い、最初に藤田明良先生の「ア

ジアのなかの中世兵庫津」の講演が始まりました。お話の内容は、南宋から元、さらに明へと中国の王朝が変わったことによって、中国と日本の貿易のあり方がどのように変化したか、博多とともに、室町幕府による勘合貿易では、兵庫津が代々の將軍自らが出向いて来た「日本国王の港」として、海外にもその名を知られた貿易港であったことなど、当時の明人・遣明船などの図像のスライドを交えながらのわかりやすいお話でした。

次の伊藤幸司先生の講演「国際交流と禅宗寺院」では、中世の日中貿易を担った博多在住の中国商人と、当時新仏教として隆盛していた禅宗との関係、そして、日本の禅宗・大覚寺派ネットワークが外交や貿易に果たした役割などについて、今も峻厳な山中に残っている中国の禅宗寺院の姿を、先生が直接撮影されてきたスライドで映しながらお話しくださいました。なかでも興味深か

ったのは、会場であった福蔵寺が博多の聖福寺・長門の東隆寺とともに、当時の国際交流の拠点であったというお話でした。講演の後、「仏教史の概説を」という質問まで飛び出すほど会場からは活発な質問があり、講演が終わったあとの茶話会では、先生方に伺いたかったことを教えていただいたり、震災史料整理で一緒の方のお仕事上の経験を伺ったりして、異業種交流のひとつを楽しみました。最後に、お若いご住職が「この福蔵寺が中世にそのような大きな役割をはたしていたことは、今日初めて知りました。これを機会に今後も学んでいこうと思いますので、またこの会場をご利用ください」とご挨拶されました。今回の講座への参加によって、私の中世的世界への興味はさらに広がっていきそうです。

(ようじ ちえこ

/ 神戸大学大学院文化科学研究科)

宮城県北部地震での被災史料の調査救出活動

～～引き続きカンパのお願い(2)～～

大 国 正 美

今年七月二十六日に発生した宮城県北部地震により、被災した歴史資料の救出を続けている宮城歴史資料ネットワーク(世話人・平川新東北大学教授)は、九月から十一月にも積極的な被災調査を行った。その概要を、前号に続いて報告する。今回も平川教授から送られてきたメールニュースを、編集部・大国の責任でまとめ、平川教授の了承を得て掲載した。なお、一次調査は一巡したが、これから二次調査や救出した資料の整理、また今後も現れる追加調査のために、引き続き資金が必要だ。特に東北地方は大学が少なく、教員・学生が少ない。また被害の大きかったところが郡部で交通費がかかるが、マスコミの報道が少なく、全国的な関心が薄れている。条件面では厳しい環境にある中で平川教授らは、地域や行政と連携しながら活動を進めている。こうした窮状に対し、阪神淡路大震災以降、資料保全活動を続けている歴史資料ネットワーク(代表・奥村弘神戸大学助教授)から募金の呼びかけがあり、要請文を、前号に掲載したが、引き続き募金を呼びかけている。

救出活動の概要

【九月二十七日】鹿島台町の文化財保護委員四名を含めた二十三名で、鹿島台町で被災状況調査を実施。『鹿島台町の文化財』や『鹿島台町史』などをもとに、調査先リストを作成。地区ごとに五グループに分け調査した。現状調査は、各グループにはそれぞれ文化財保護委員と公民館職員が一人ずつ、案内役として付き添った。地元の同伴で、調査先に不審がられることもなく、ほとんどの家で丁寧に調査に応じてもらい、地元とのタイアップの重要性を確認した。近世の旅日記なども発見。蔵の屋根が損壊して雨漏りし、漢籍などの多くの書籍が濡れてカビがはえている家もあった。

この地域は水害常襲地帯で古文書はあまり残っていないということで、文献記録所有者として把握できていたのは四軒だけだったため、『鹿島台町の文化財』第一集(一九七五)で特集を組んでいた古民家リストも使いリストアップ、全部で三十四軒になった。同町文化財保護委員長によると、昭和四十年代には

百戸以上の古民家があったが、五十年代には半減、一九九四年の調査ではさらに半減したという。今回の調査ではさらに少なくなっていた。

【九月二十八日】河南町の縄文記念館（斎藤善右衛門屋敷）に展示してあった宝が峯式の縄文土器の多くが破損していたが、八月三十一日に破損片を一点残らず収集して、東北大学埋蔵文化財調査研究センターに搬出し、ボランティアにより土器三十五点の修復を終え、同記念館に搬入した。九月二十九日河北新報で報道された。

【十月十九日】鳴瀬町で被災状況の現状調査を実施。仙台からの九人に、石巻古文書の会や地元の文化財保護委員も加わり計十六人が参加。地区ごとに五グループに分けて四十二件を調査。古物・古文書ともにおおむね大切に保管されていた。また漢籍や手習本、明治期の貸金証文などが新たに確認された。この地区は今回の地震でも相当に被害を受けているが、一九七八年六月十二日の宮城県沖地震（マグニチュード7・4 震度5）のときにも大きな被害を受けて家を建て替え、そのときに文書類を焼却したという家があった。

訪ねた家では、この調査に大いに関心を示し、熱心に地区のことや自分の家の由緒などを語る人も少なくなかった。「あそこが渡船場でね、いまも杭が残っているよ」「江戸時代の街道は町内のここを曲がってこういくんだよ」「子どものころにはあの橋から川に飛び込んで太平洋まで泳いでいったもんだ」などと。

地震で損壊したために今も不通になっている鳴瀬川の小野橋は、昭和十二年にいまの橋に付け替えられたのだそうだが、そのときに取り壊された橋げたの材木を大切に保管されている人もいた。「板が割れて自動車は何台も川に落ちたもんだ」などと聞くと、妙にリアリティがある。「この地区の歴史のことならあの方がよくごぞんじですよ」「あのお宅には史料があるのではないか」などと、別なお宅を紹介して頂くことも、しばしばあった。

地震による同町の被害は、全壊四百五十二軒、半壊九百七十軒、一部損壊二千十三軒となっている。裏通りの道路はまだ陥没したままのところがあった。

【十一月一日】矢本町で被災状況の現状調査

を実施した。参加者は二十一人で、地元の文化財保護委員にも協力を得た。町内調査は地区ごとに六グループに分け、調査リスト四十四件と、ヒアリングで一件追加があり、全部で四十五件となった。一軒で一時間以上ヒアリングというのも少なくない。

地震による矢本町的全壊家屋は四百二十七軒、半壊千二百六十二軒で、これは鳴瀬町の全壊と並ぶ最大級の被害。それだけに町内の主要道路の痛みも激しく、まだかなり波打った状態のところがあった。道路沿いに、家屋を解体した更地がいたるところにあった。

江戸時代に旅籠を営み、明治五年築の母屋が全壊した家では、倉庫から安政 明治の文書や軸物が数十点出てきた。再訪して保全作業をすることになった。

矢本宿の旅籠屋で、幕末に肝入を務めた家に、浪速講の看板や多くの民具類があった。ふすまの裏張りも保管しており裏張り文書を預かった。一枚一枚はがしてきれいに整え、目録をとって返す予定。

すでに別宅を建てたため明治初年築の母屋を近く取り壊す予定の家では、地震直後に骨董屋がやってきて、かなりのものをもっていったとのことだった。骨董屋に「奥さん大変でしょう、私たちが片づけますよ」と言われ、お願いしますといたら、めぼしいものを全部運び出し、五万円置いてもっていったという。「家のなかがガタガタになっていたので気が動転してウンと行ったけど、仏像もなくなっていった。いくつかはあとで返してもらったけど、ひどいねえ」と語っていた。奥さんが「そういえば大事そうな書類箱があった」と言うので、閉め切っていた母屋に入り、あちこちをひっくり返してようやく書類箱を探し出した。仙台藩が各村に書き上げさせた地誌の「安永風土記書上」と系図などを入れている旨の箱書きがあったが、「安永風土記書上」はみえず、系図があるだけだった。いつなくなったかはわからないという。

【十一月八日】十九人が参加し南郷町で被災状況調査を実施した。地元からは教委生涯学習課長をはじめとする職員、文化財保護指導地区委員、前教育長、元公民館長、地区長など、多彩な八人が参加。地区ごとに五グループに分けて三十二軒を調査した。

地震による矢本町の全壊家屋は百四十五軒、半壊四百四十八軒。美しい田園風景の広がる地域だが、震源地である旭山も間近に見え、痛々しい。生涯学習課長は「地震後は旭山の形が少し変わった」と言っていた。山の形が変わるほどの地震というのも想像を絶する。

調査の結果、河南町の斎藤善右衛門家に次ぐ県内第二位の大地主の膨大な史料が、つい一カ月前に焼却されていたことが判明した。一カ月前といえば、別の町で活動をしているとき。いまさら悔やんでも仕方がないが、最大の教訓は複数の町で同時並行して調査やレスキューを進めることができなければということで、痛い教訓となった。

大正時代の養蚕小屋が全壊し、そのなかにはいっていたさまざまな農具類をすべて処分した家もあった。これも一カ月前のことだという。当主によれば、養蚕小屋とその中の民具類それ自体が資料館のようだったという。一方「これからちゃんと管理できるかどうか心配で、役にたつのなら史料を博物館に寄付したい」という家もあり、東北歴史博物館にその意向を伝えた。

すでに建て増しなどをして表からの外観は現代風になっているが、奥の建物は江戸時代のものという旧家があった。当主によるとその家は飢饉のときに建てたとのことだった。いつの飢饉かまでは分からないとのことだったが、窮民対策のひとつだったのかもしれない。別の家で明治初期の耕地地図を見たとき、整然と区画されていることについて、前教育長は「この村では窮民対策として江戸時代から耕地整理をやっていた。慈恵地主が多かったと言われている」と話していた。

この南郷町をもって激甚被害をうけた五町の被災調査をひととおり終えた。とはいえ被災地全体でいえば二次調査や史料整理などが必要な家も少なくない。預かったフスマの裏張りの解体・整理作業も始まった。集積した大量の現状確認データも、これからデータベース化する。

行政との連携に神戸の教訓

宮城資料ネットの保全活動は、文化財保護課と密接な連絡を取りながら進めている。行政の側でできることと、ボランティアの側でできることを、どううまく組み合わせながら

効果的に実施するか、常に念頭におかれ、その成果は着実に出ている。さらにその連携を強めるべく、宮城県文化財保護課の主催で、十一月十二日、東北歴史博物館講堂（多賀城市）を会場に、宮城県文化財研修講座が開催された。本来は、県内自治体の文化財担当者や文化財保護委員に対する講座で、一般に公開されていないが、今回は特別に公開した。

神戸に事務局がある歴史資料ネットワーク代表の奥村弘神戸大学助教授が、阪神大震災以降の地域歴史遺産保全活動を踏まえて「現代社会における歴史文化の位置」と題して講演、宮城歴史資料保全ネットワーク世話人の平川新東北大学教授が「宮城地震と歴史資料保全活動」、河南町教委の中野祐平さんが「河南町の文化財被害状況と復旧活動」についてそれぞれ報告した。奥村助教授は宮城地震のあとすぐに現地入りし、宮城での救済活動の大きなきっかけをつくった。阪神大震災や鳥取震災などで資料保全活動を立ち上げてきた意義などについて語った。

宮城県北部連続地震被災史料救出活動支援募金（郵便振替）

口座番号：00930 1 53945

加入者名：歴史資料ネットワーク

振替用紙に宮城県北部連続地震カンパとお書きください。

【問い合わせ先】

歴史資料ネットワーク

代表 奥村 弘（神戸大学助教授）

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1 1

神戸大学文学部内

URL

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/macchan/>

メール s-net@lit.kobe-u.ac.jp

TEL&FAX 078 803 5565

（平日 13時～17時）

宮城歴史資料保全ネットワーク

連絡先 平川 新（東北大学教授）

メール hirakawa@cneas.tohoku.ac.jp

TEL 022 217 7693（研究室）

（おおくに まさみ / 史料ネット運営委員）

まちづくりシンポジウム

『バーチャル富松城歴史博物館から見えてきたもの』

後藤 真

2003年9月28日、尼崎市立「立花公民館」にて「まちづくりシンポジウム『バーチャル富松城歴史博物館から見えてきたもの』」が行われた。参加者として若干の感想を述べたい。

第1部は「ようこそ！ 富松城歴史博物館へ」として、富松城跡を活かすまちづくり委員会（以下まちづくり委員会）の松田清子氏と、神戸大学文学部地域連携センターの村井良介氏が、富松城歴史博物館 web ページの構成や展示室・研究室を紹介、説明した。第2部は「まちづくりシンポジウム『バーチャル富松城歴史博物館から見えてきたもの』」として、コーディネーターに川口宏海氏、パネリストに善見壽男氏、市澤哲氏、中村武生氏を迎えて、バーチャル富松城歴史博物館の意義と、地域における文化財保存のあり方、歴史学・考古学の社会への還元の方法などが討論された。

紙幅の関係上、詳細な内容を逐一ここで述べるわけにはいかない。簡単な概要のみを整理しておきたい。このバーチャル富松城歴史博物館館長であり、富松神社宮司である善見氏からは、おもに富松城跡の保存運動の経緯と富松城跡を残す事の意義を中心に、尼崎の他地域の事例をひきながら話を展開された。富松城跡が「私たちのふるさと」としてこどもたちにも、しっかりと伝えていけるための方法を模索する必要があるとの重要な提言があった。神戸大学文学部地域連携センターの

市沢氏は善見氏の発言をうけて、このような重要な提言を、学問を行う側がどのように汲み取っていけるかが問題である。むしろ地域の人々が大学などに教えてくれている点が多い、との話を中心に論を展開した。また、このような社会の提言をしっかりと受け止め、学問を行うことこそが大学の「生き残り」に重要であるとの指摘をした。中村氏は御土居堀研究会に携わり、御土居堀の保存運動の経験から、軽妙に話を進めた。文化財保存の難しさ、今後向かうべきあり方を豊かな経験から指摘した。これらの話をうけ、川口氏がフロアからの発言を求めながら、文化財保存と地域の歴史をどのように考えるかを展開していった。

このシンポジウムでの重要な論点は二つある。一つは、文化財保存の方法である。今現在でも文化財は「優品」中心主義であり、「日本国家史」を描けるものを中心に保存する動きは強い。この動きは、文化庁 都道府県教育委員会 市町村教育委員会のいわば「中央中心」の文化財保存システムが、日本の文化財保存手段の中心であることが原因の一つであろう。このシステムでは地元の意向と遊離し、文化庁と研究者のみで議論は展開される。地元の人々は文化財の存在を知らずに「当該地域の開発」を望むこととなる。このシステムに変更をくわえねばならない。いかにして民有のまま、地元の人々が方法を考えて文化財を保存するかが議論されるのは非常に重要であるといえよう。善見氏が展開したように、文化財保存、歴史意識はこの地域においては先進地域であるという事ができよう。

もう一つは地域の人々が歴史を考えるとどのようなことか、を議論していることである。そのツールの一つとしてコンピュータとインターネットを用いている点は、今後のあり方として注目すべきであろう。必ずしもあらゆる世代に普及しているものではないが、



「バーチャル博物館富松城歴史博物館」web ページより

より開かれたツールとして、インターネットの使用は検討してしかるべきものであろう。

最後に、富松の人々の歴史を考え富松城跡を守ろうとする情熱がもう少し聞ければもっとよいものとなったであろう。フロアからも

う少し活発な議論があると、参加しているものが考える機会とよりなりえたであろう。後の酒席で参加者同士（私も含めてだが...）で活発な議論が行われていただけに残念である。

（ごとう まこと / 大阪市立大学大学院）

内閣府設置「歴史資料として重要な公文書等の適切な保存・利用等のための研究会」の中間取りまとめについて（１）

辻川 敦

日本における「公文書館に関する制度等の拡充・強化を図る方策を検討する」ことを目的として、内閣府大臣官房長決裁により本年５月に設置された「歴史資料として重要な公文書等の適切な保存・利用等のための研究会」による「中間取りまとめ」が、この７月に発表された。今後まとめられるであろう本研究会の答申は、今後の日本における公文書館行政にとって重要な意味を有するものになると思われる。中間報告段階で評価をくだすのは性急かもしれないが、あえて評価するとすれば、本研究会の答申は、日本の国レベルの公文書館行政を抜本的に改革する端緒となる可能性がないこともない、答申の影響には、若干危惧されるべき点もある、一方、地方の公文書館、史料保存行政にはほとんど影響しないであろう、というのが結論である。

以下、本研究会の経緯や検討内容を紹介しながら、上記評価の理由についてあきらかにしたい。

なお、本研究会の設置に関する文書や委員名簿、各回の配布資料や議事要旨は、すべて内閣府ＨＰ内において公開されている。

（<http://www8.cao.go.jp/chosei/koubun/>）研究会による検討の前提となる、国・地方および諸外国の文書館に関する詳細な調査データもアップされており、さまざまな意味で有益なデータベースとなっている。

研究会設置の経緯

さきにもふれたとおり、本研究会は内閣府大臣官房長決裁（２００３年４月１１日付）により設置された。委嘱された研究会メンバーは、以下の通りである。

座長 高山正也（慶應義塾大学文学部教授、図書館学・情報学）

座長代理 後藤仁（神奈川大学法学部教授、元神奈川県立公文書館館長）
委員 加賀美幸子（千葉市女性センター館長、NHKアーカイブズにて番組製作）
委員 加藤陽子（東京大学大学院人文社会科学系研究科助教授、日本近代外交・軍事史）
委員 小谷宏三（平成国際大学法学部教授、元内閣法制局・総理府勤務）
委員 三宅弘（弁護士、情報公開法立法運動）
委員 山田洋（一橋大学大学院法学研究科教授、行政法学）

ほかに、オブザーバーとして国立公文書館長が研究会に加わっている。また研究会の庶務は、独立行政法人国立公文書館の協力を得て大臣官房企画調整課が担当している。

５月１２日に開催された第１回研究会の議事要旨を見ると、本研究会設置の経緯がよくわかる。この研究会には、福田康夫内閣官房長官自身が出席している（前半約三分の一ほどで退席）。また冒頭の内閣府大臣官房長のあいさつによれば、この研究会そのものが、「国立公文書館の充実・強化を真剣に考えるべき」という福田官房長官自身の強い指摘により設置されたものであるという。

第１回研究会では、官房長あいさつに続いて、福田官房長官自身が研究会設置を必要と考える理由・背景について発言している。その要点は、おおむね、国の公文書を後世に残すことの重要性、対して、日本の施策・事業の国際的な立ち後れ、行政の説明責任や、国民の情報利用要望など意識の変化、情報化、電子文書化、インターネット社会に対応した施策の必要性、市町村合併における公文書保存への対応、といった内容

である。誰が官房長官にレクチャーしたのか、国の公文書館行政がおかれている現状に対して、それなりにリアルな理解と認識に立った見解であると言ってよいだろう。福田官房長官はこの冒頭発言の後にも、自身の海外における見聞などを披瀝しながら見解を述べており、これらを額面どおりに受け取れば、長官自身が一定の理解と問題意識を持っているように見受けられる。

研究会委員の人选については、どう評価すべきなのか、正直筆者にはよくわからない。ユーザーサイドに立った委員も選任されているし、議事要旨をすべて精読したわけではないが、検討されている内容もそれなりに幅広い視野と認識に立っており、一応バランスのとれたメンバー構成と言えるのかもしれない。ただ、本研究会の設置主体が、長く日本の文書館学・アーカイブズ学を担ってきた国立国文学研究資料館・史料館や全史料協の人脈に対して、あまり重きを置いていないであろうことだけは間違いないだろう（誤解を避けるために付言しておけば、委員のひとりである後藤仁氏は神奈川県立公文書館長時代に全史料協会長を務めているので、委員会が全史料協の人脈とまったく無関係とは言えないのだが……）

研究会における検討内容と「中間取りまとめ」

このように、ときの政府高官の肝いりによりスタートした本研究会は、7月まで4回の研究会を開催した。そこにおいて、国や地方、そして海外の文書館事業事例などを調査検討した結果、まとめられたのが「中間取りまとめ」である。その目次は以下の通り。

はじめに

1 わが国公文書館制度の抱える課題

2 これまでの検討状況及び直ちに対応すべき事項

おわりに

「はじめに」および1の冒頭では、ほぼさきほど紹介した福田官房長官発言とほぼ同じ内容の研究会設置理由＝現状認識が示されている。以下、1ではその具体的な表れとして、目次番号ごとに次の諸点をあげる。

- (1) 国立公文書館への公文書移管の不十分性、とりわけ情報公開法施行や省庁再編、国立公文書館のエージェンシー化にともなう移管文書量の激減という問題がある。
- (2)(3) 国際的に見ても、本来高度な専門性を有する専門職員「アーキビスト」の養成制度と配置が必要であるにもかかわらず、人数の点でも質の点でも不十分。
- (4)(5) 公文書の電子化、デジタルアーカイブ化への対応の遅れ。デジタル化の推進、一般利用者サイドに立った検索システムの必要性、自治体公文書館との情報ネットワーク化の課題などにも言及している。
- (6) 地方自治体の施策の不十分性。本来、地方自治にゆだねるべき分野であるとの前提のもと、国による支援の必要性を指摘。

2および「おわりに」においては、おおむね上記諸点に対応した施策の充実・拡充の必要性を指摘している。繰り返しになるので、詳細は省略する。

(以下次号)

(つじかわ あつし/史料ネット運営委員)

震災史料整理～プロローグ・山本家（中田樽丸関係）文書～

阪神・淡路大震災の際にレスキューし、現在神戸大学に保管されている史料群の整理作業が開始されてほぼ一年が経過しました。参加されたボランティアの方々からニュースレターに寄せていただいた感想、また、ニュースレター34号で添田仁氏がまとめられた整理作業の現状と課題などから、作業そのものの状況についてはこれまでかなり詳しくお伝えすることができたのではないかと思います。今後も作業経過はその都度ご報告できればと考えていますが、整理担当者の間では、それとは別に、これまでの整理の成果も是

非何らかの形で紹介する場を設けたい、との意見があがっていました。そこで、ひとつの試みとして、「震災史料整理便り」と題し、整理された史料の内容についてのレポートをシリーズで連載していくことにしました。ひとまず今回は、プロローグとして、現在整理進行中の山本家文書（中田樽丸関係文書）について、レスキュー活動の様子と史料の概要についてご説明しておきたいと思います。

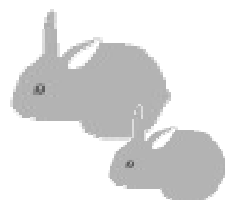
『歴史資料ネットワーク活動報告書』（以下、『報告書』）によりますと、山本家のレスキュー活動

は、1995年7月1日、1996年3月28日の2回行われ、神戸大学への搬送は2回目の作業の時だそうです。山本家文書には、山本家自身の史料も存在しますが、大部分は、以前家屋の所有者であった樽丸問屋「中田樽丸」の経営関係史料です。後者については、「家屋の二階、壁に隠されて一階の屋根裏部屋の如き空間となっていた一角から、偶然発見」された、とのことでした(『報告書』森田竜雄氏執筆部分)。山本家は、この家屋に明治初期に入居し、以後住宅として使用していたそうですが(『報告書』中条健太氏執筆部分)、現在までに整理した「中田樽丸」の史料の中には、昭和初年の日付のある書簡・経営帳簿が多数存在していますので、単純に持ち主の交替によって残されたものとは考えがたいと思われます。また、レスキュー当時の聞き取り調査の中で、山本家の方から、このようなかたちで文書が引き継がれた経緯についてお話があったそうですが、それでもまだまだ不明な点が多く残されています。今後、

整理作業を進めていけば、何か手掛かりが発見できるかもしれません。

さて、山本家文書は、神戸大学に保管されている文書群でも一、二を争う膨大な量であり、段ボールにして四七箱あります。現在整理を終えた分は、全て近代の、「中田樽丸」経営関係のもので、内容は、樽の材料の仕入先、もしくは樽の出荷先と交わされた取引の書簡・はがきが主で他には経営帳簿・写真などがありました。書簡・はがきの差出を見ていると、「中田樽丸」の取引先は全国に及んでいることがわかります。また、昭和初年になりますと、一部は南洋諸島などでも取引があったことがうかがえ、「中田樽丸」はかなりの経営規模を有する樽の製造会社であったようです。

次回以降は、もう少し具体的に史料紹介をしていきたいと思えます。(K)



受贈図書

書名	筆者(著者)	発行所	発行年月日	備考
アーカイブ前史	震災・まちのアーカイブ	震災・まちのアーカイブ	2003/10/16	「中央区ボランティア資料」CD付き

文献情報

書名	筆者(著者)	発行所	発行年月日	備考
アーカイブ前史	震災・まちのアーカイブ	震災・まちのアーカイブ	2003/10/16	「中央区ボランティア資料」CD付き

論文等表題	筆者(著者)	誌名(書名)	巻号	頁	発行年月日
人と防災未来センターにおける震災資料の保存と活用	阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター資料室	『記録と史料』	13	50 ~ 52	2003/03/28
被災地と歴史意識の現在-史料ネット「市民歴史講座から」	菅祥明	『地方史研究』	304 (53-4)	90 ~ 94	2003/08/01

神戸都市史研究会

三村昌司

2003年11月10日(月) 神戸大学文学部において第6回神戸都市史研究会が開催されました。今回の研究会では、まずはじめに河島真氏が「エルトゥール号事件」というタイトルで報告されました。「エルトゥール号事件」とは1890(明治23)年にトルコ軍艦エルトゥール号が和歌山県大島沖で沈没した事件です。死者・行方不明者は650名(諸説あり)に上りましたが、生存者69名のうち日本船に救助された2名が神戸に収容されたということで、神戸とも縁のある事件です。

この事件に対し、『時事新報』や『神戸又新日報』などの新聞が、トルコへの義捐金募集活動を展開し、義侠心溢れる日本及び日本国民を世界各国にアピールしようと訴えました。報告ではこの新聞の論調に、「明治憲法」に即したナショナリズムの形成を図ろうとする「自発的な試み」を見出そうとするものでした。

続いて秋元せき氏が「明治後期西陣の失業者救済策 日露開戦と西陣の施粥をめぐる」というタイトルで報告されました。

この報告では日露開戦直後に西陣でおこった「お粥騒ぎ」(粥騒動)に焦点を当て、まず当時の西陣の職人・機業家・織物商の状況を明かにしました。次いで西陣における窮民の発生は開戦前からの機業界の不況が日露戦争による内地需要の減少によって決定的となる過程と、西陣機業家と織物商のそれぞれの貧民救助活動を描き出しました。さらにのちの工場法への展開をも見通すことで、この騒動が都市問題としての意味を持っていることを指摘されました。

両方とも興味深い問題を多く含んだ報告であったことから議論も白熱し、夜7時にはじまった研究会が終わったのは10時半になろうかという時間でした。少し頑張りすぎたかな、という声も聞かれましたが、議論が盛り上がるのは研究会として成功を意味していると思っています。ただもう少しだけ始まる時間を早めても良いかな、とは思いましたが。

次回は報告者、日時ともまだ未定ですが、年度内にもう一度と考えています。また決まり次第この欄でお知らせしていきたいと思えます。
(みむら しょうじ/神戸大学大学院文化科学研究科)

【新刊紹介】

井上真理子著『尼崎相撲ものがたり』 2003年8月 神戸新聞総合出版センター

B6判 202p 定価1,300円(税別)

『歴史と神戸』誌上に「聞き書き ありし日のまちと暮らし」を連載中の筆者が、ここ数年かけて調べた尼崎と相撲にまつわる三つのエピソードをまとめた初の単著。

第一章は「鉄かぶとの力士たち」。戦時中、二所ノ関部屋一門が尼崎と鳴尾に分宿し、軍需工場で勤労働員や慰問相撲をして食いつないだ話を紹介する。人気力士の神風や、戦後プロレスに転向する力道山も当時尼崎に住み、さまざまなエピソードを残した。

第二章は「国技館がやってくる」。戦前は大阪にも国技館が作られ、さらに尼崎にも計画が持ち上がる。相撲協会の有力者・入間川のもくろみに、資本家・不動産ブローカーがむらがるが、結局実現せず、予定地には当時日

本最大の軍用プロペラ工場が建設される。

第三章は「裸の王様 大谷竹次郎伝」元力士のワンマン社長が経営する大谷重工は実業団相撲日本一であったが、鉄鋼合理化のなか、やがて経営破綻し消滅していく。それは、高度成長初期の日本経済を牽引した、尼崎鉄鋼業の象徴でもあった。

猪瀬直樹の『土地の神話』に学んだという著者は、これらのエピソードを綿密な史料調査と、数多くの聞き取りによって描き出した。同時に本書は、筆者を取り巻く市民の歴史研究ネットワークの所産でもある。神戸新聞書評が「歴史叙述の方法を考えさせる一冊」と評した本書を、歴史をこころざす多くの方々にぜひ読んでいただきたいと思う。

尼崎市立地域研究史料館紀要『地域史研究』第33巻第1号（通巻96号）

2003年9月 A5判 98p 頒価850円（第33巻通巻購読の場合は1,500円）

本誌は巻頭に、仁木宏氏による「戦国富松都市論 - 尼崎市富松城・富松集落の研究 - 」を掲載。これは仁木氏が、富松城跡をめぐる第2回シンポ（2002年6月、富松城跡を活かすまちづくり委員会開催、史料ネット後援）での講演内容をもとに、新たな論点も加えて書き下ろしたものである。中世戦国期、西摂交通の要衝であった富松は、ふたつの城を持ち、集落全体も城郭的な構造を持つ都市的存在であったと結論付ける。

さらに本誌は、尼崎町発祥と密接に関わる大覚寺縁起を美術史の立場から検証した高岸輝氏の論文や、宮本敏一氏による富松城跡を活かすまちづくり委員会の取り組みレポート、西摂研究会や尼崎戦後史聞き取り研究会の彙報などを掲載している。

なお、冒頭紹介した仁木論文のダイジェストが、尼崎市立地域研究史料館作成の「尼崎の歴史」HP（<http://www.city.amagasaki.hyogo.jp/web/contents/info/city/city03/chiiki-shiryokan/>）に、「トピックス尼崎こんな歴史」Vol.5として紹介されている。

震災資料のゆくたて

菅 祥 明

デジタル・ネットワークの拡張はたしかに利便を広範囲にもたらしている。図書館もその受益者である。武邑光裕の「いまや記録は記憶のあるべき場所に留まっていない」*という言葉は、国内外で進むデジタルアーカイブやデジタルミュージアムの構築によっても裏付けられるだろう。紙媒体の記録もデジタル化されるとき、その先には占有を拒み、情報の共有を可能にする回路が開かれる。そして、それぞれの結節点に私たちも立っている。

震災・まちのアーカイブは2003年10月に『アーカイブ前史』を発行したが、そこには「中央区ボランティア資料」というCD-ROMを同封している。冊子としての『アーカイブ前史』では、ボランティアによって始められた震災資料収集の経緯を当事者へのインタビューで明らかにし、さらに、震災・まちのアーカイブなどが所蔵する「中央区ボランティア資料」の記述目録も掲載している。CD-ROMにおいては、「中央区ボランティア資料」に関する各種目録とともに、同ボランティアが発行したミニコミをPDF形式に変換してパソコン上で閲覧できる試みも行なった。

そのCD-ROMも、デジタルアーカイビングの基本原則に準ずるかたちで制作が進められた。すなわち、電磁的記録媒体の寿命やアプリケーションソフトの汎用性など、それらの限界を認識した上で資料のデジタル化が進められたのである。CD-ROMの耐用年数は30～100年とも言われるが、新たな媒体の普及などを勘案すると実質的な寿命はそれより短くなる。震災・まちのアーカイブでも、Windows95以前のOSで作られたデータ

が判読出来ないという事態に見舞われたこともあった。そういった制約を考慮すると、可読性の点では紙媒体が最も有効かつ安全と言えなくもない。

それにも関わらず CD-ROM を制作した理由はいくつかある。まず第 1 に、所蔵資料の閲覧および利用者の少なさがある。ボランティアの活動記録を中心に震災一次資料を所蔵しているが、その利用は 1 ヶ月に数度あるか無いからだ。図書館はその存在意義を伝播させる部分において能動的であることが求められる。第 2 に、日々、資料に触れている震災・まちのアーカイブが、資料のもつ意味や紙媒体だからこそ持ち得る「重み」や「ぬくもり」を再認識したくて、あえてデジタル化という方途を選んだ。そして最後に、「継承」ということの、筆者なりの回答をこの CD-ROM で示したつもりである。

ボランティアが集めた資料をいかにして活かせば良いのか、ずっとそのことを考えていた。かつて彼らが抱いた「熱さ」を受け継ぎ、それを伝えなかった。『アーカイブ前史』は、震災資料と関わったボランティアたちの存在証明でもあるのだ。

* 『記憶のゆくたて』（武邑光裕著、東京大学出版会、2003 年）

（すが よしあき / 震災・まちのアーカイブ）



編集後記

街角ではコートに身を包む人の姿も増え、そろそろ冬本番といったところでしょうか。個人的にはスキー場に足を運べる日を心待ちにしている今日このごろです。

さて、今回のニュースレターも、第 1 回の歴史講座を筆頭に盛りだくさんの内容となりました。ご味読ください。

ニュースレターの大国氏の報告にもありますように、宮城資料ネットでは、現在も精力的に活動を展開しています。引き続き会員・サポーターの皆様には宮城資料ネットの活動に対するご支援・ご協力を賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

また、事務局では会員・サポーターの方々からのニュースレターへ寄稿をお待ちしております。今後とも魅力ある紙面作りに取り組んでまいりたいと思いますので、ご協力いただければ幸いです。（こ）



史料ネット講座

シリーズ歴史遺産を考える 第2回

地域遺産としての自然海岸

主催＝歴史資料ネットワーク
共催＝神戸大学文学部地域連携センター
後援＝兵庫県教育委員会・神戸市教育委員会
芦屋市教育委員会・西宮市教育委員会ほか

日時：2003年12月6日（土）13時30分～16時30分

場所：深江会館（神戸市東灘区深江本町3-5-7 阪神深江駅南東スグ
大日靈女神社境内）

講演

坂江 渉氏 神戸大学文学部
地域連携センター主任研究員

「古代の浜辺と生活・信仰・伝承～西摂・神戸の松原海岸」

友野哲彦氏 神戸商科大学助教授

「自然海岸のもつ経済的価値～環境経済学の立場から」

ディスカッション

司会 **高橋明裕氏**

立命館大学非常勤講師



芦屋浦と深江の踊松（摂津名所図会より）

参加申し込み方法：FAX・メール・ハガキのいずれかに、住所・氏名・年齢・電話番号をお書き添えのうえ、下記史料ネットまでお申し込みください。

定員80名、参加費無料（資料代500円が別途必要）

申し込み先 **歴史資料ネットワーク（略称 史料ネット）**

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 神戸大学文学部地域連携センター気付 TEL&FAX：078-803-5565（平日午後開室）

e-mail：s-net@lit.kobe-u.ac.jp URL：http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~macchan/

阪神・淡路大震災以来、災害時の歴史資料の保全、地域のなかの歴史遺産の活用、大震災の記録化などに取り組んでいる市民・学生・研究者のボランティア団体です。関心のある方は、ホームページをのぞいてください。ニュースレター・メールニュースも発行中

個人会員への入会と“News Letter”購読のお願い

史料ネットの活動に平素からご協力いただき、ありがとうございます。

歴史資料ネットワークは、改組後も引き続き“News Letter”を年4回発行いたします(年間購読料: 郵送費込み1000円)。改組とともに今後内容を更に充実させる努力を重ねて参ります。皆様方には引き続きご購読いただきますよう、よろしくお願い致します。

また、表題にもありますように、ニュースレター会員・贈呈読者の皆様には是非とも個人会員へのご入会(年会費:個人会員5000円、学生・院生会員は半額)ないしサポーター(一口3000円以上)としてご支援いただき、史料ネットの発展にご理解・ご協力を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

史料ネット 郵便振替口座

名義: 歴史資料ネットワーク

口座番号: 00930-1-53945

史料保存関係のホームページ“Archivist in Japan”を開設している小林年春さんのご協力により、史料ネットの情報を同ホームページに連載していただいています。<http://www.archivists.com/> または <http://member.nifty.ne.jp/archivists.com/> または <http://www.asahi-net.or.jp/~hm7t-kbys/archivists/>

史料ネット NEWS LETTER No.35

編集・発行 歴史資料ネットワーク

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1 神戸大学文学部地域連携センター気付 史料ネット神戸センター

TEL&FAX:078-803-5565 (開室時間 平日の午後1時 5時)

URL:<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/> macchan/ e-mail:s-net@lit.kobe-u.ac.jp